

生徒の社会的比較志向性と学業的援助要請の関連

野崎 秀正

The Effects of Social Comparison Orientation on Academic Help-Seeking Hidemasa NOSAKI

summary

Academic help-seeking is an important learning strategy that students use to solve difficult problems. However students often avoid asking questions or requesting help even when they need help. Some previous studies have explored what factors affect their academic help seeking. The purpose of this study was to investigate the influence of social comparison orientation and academic competence on academic help-seeking. Participants were 209 (106 boys ; 103 girls) students in a Japanese junior high school. The results showed the following: 1) the factor analysis showed the two factors (ability comparison and opinion comparison) of the social comparison orientation following previous studies, 2) in the group of high academic competence, students with a high opinion comparison asked more help than students with a low one, 3) ability comparison did not affect the academic help seeking in the two competence groups. These results suggested that academic help seeking may be a means for participants to know the degree of their peers' understanding.

問 題

教室場面において、児童や生徒は、必ずしも単独で学習を進めるわけではなく、教師や友達をはじめとする他者との相互作用を介して課題に取り組む場合がある。特に、難しい課題を解くために他者に課題解決のための援助を求める行為は、学業的援助要請 (academic help-seeking) と呼ばれる (野崎, 2003)。学業的援助要請を効果的に使用する学習者は、高い学業成績を修めることができるが、そうでない学習者はわからない問題を棚上げすることになるため不利益を被ることになる。そのため、学業的援助要請は学習を効果的に行うのに必要な自己調整学習方略であるといえる (Zimmerman & Martinez-Pons, 1990)。しかし、これまでの研究において、学習者の多くは、援助が必要であると認知しているときでさえも学業的援助要請を行わないことが報告されている (Good, Slaving, Harel & Emerson, 1987 ; Newman, 1990 ; Newman & Goldin, 1990)。この問題を明らかにするために、従来、学業的援助要請の規定因の解明を目的とした多くの研究が行われてきた。

これまでの研究において学業的援助要請を抑制させる要因として中心的に検討されてきたものに要請に伴う自尊心への脅威がある。他者に援助を求めることは、直面する困難な課題の解決に効果をもたらすが、同時に援助を求める人の独立心や能力感を脅かす行為にもなる。そのため、そうし

た自尊心に対する脅威を避けようとして意図的に援助要請を差し控えるのである (Nadler & Fisher, 1986)。それでは、こうした脅威を認知し始めるのはどのくらいの年齢からなのだろうか。このことについて Newman & Goldin (1990) は、エレメンタリースクールの2年生 (平均8.0歳) の段階ではすでに学業的援助要請に伴う教師からの否定的な評価に対して脅威を抱くようになることを明らかにしている (例, 「私が質問すると先生は私のことを頭が良くないと思うかもしれません。」)。しかし、脅威の態度が実際に学業的援助要請を抑制するのはさらに学年があがってからである。Newman (1990) は、エレメンタリースクールの3年生 (平均9.0歳)、5年生 (平均11.1歳)、7年生 (平均13.1歳) の児童を対象に学業的援助要請に対する脅威の態度が学業的援助要請に及ぼす影響を検討した。その結果、7年生の児童においてのみ、自己への否定的な評価に基づく脅威が学業的援助要請の回避に影響を及ぼしていることを明らかにした。さらに、ジュニアハイスクールの7年生 (平均12.8歳) と8年生 (平均13.7歳) の生徒を対象とした Ryan & Pintrich (1997) の研究でも、脅威の態度が学業的援助要請を抑制することを明らかにしている。また、わが国において中学生を対象とした野崎 (2003) の研究においても、欧米諸国で行われた研究と同様に能力感への脅威が学業的援助要請の回避を促すことを明らかにしている。

これらの研究結果は、学業的援助要請に対する脅威の態度が学業的援助要請を抑制し、さらに、こうした傾向は学年が上がるにつれて、すなわち青年期に近づくにつれて顕著になることを示している。それではなぜ、青年期に近づくにつれて、脅威の態度が学業的援助要請を抑制する傾向が高まるのだろうか。一つの理由としては、発達に伴い自分の能力と他者の能力を比較するようになること、すなわち社会的比較 (social comparison) を行うようになることである。社会的比較とは「自分と他者を比較することの総称」(高田, 1992) であり、学業的援助要請に伴う社会的比較は、要請する者に自尊心への脅威を喚起させる。つまり、学習場面において援助を求めることは、他者には解けるはずの問題を自分には解けないこと意味し、このことは他者と比較して相対的に自分自身の能力が劣っていることを他者に示す、あるいは自分自身で認めることになるのである。さらに、援助要請の際の社会的比較に伴う脅威は、自分と類似した存在である友達に援助を求める際に特に高くなるとされる。これは、自分とは立場や能力が明らかに異なる教師に援助を求めるときよりも自分に類似している友達に対して援助を求めるときの方が、自分がその相手より劣っていることを示しやすくなるためである (西川, 1998)。実際に、Newman & Goldin (1990) は、友達に対する学業的援助要請の方が教師に対する学業的援助要請よりも、能力感への脅威になりやすく、否定的に認知されることを明らかにしている。

社会的比較に伴う自尊心への脅威が学業的援助要請を抑制するのであれば、自分と他者を比べる傾向の高い者ほど学業的援助要請を回避することが考えられる。社会的比較を行う程度の個人差については、近年、それを測定しようとする試みがいくつか行われている。Gibbons & Buunk (1999) は、「他の人のやり方と比べて自分のやり方はどうであるかをいつも気にしている」など他者との能力の比較に関連した概念である「能力比較」と「自分と似たような問題に直面している人が、何を考えているのかをよく知ろうとする」など他者の意見を参考する傾向の高さに関連した「意見比

較」の概念から構成される社会的比較志向性 (Social comparison orientation) 尺度を作成した。さらに、外山 (2002) はこの日本語版を作成し、信頼性と妥当性の高さを確認した。Gibbons & Buunk (1999) の尺度のうち、能力比較については、自尊心への脅威に関連があると思われるため、それが高い者ほど学業的援助要請を回避することが考えられる。しかし、能力比較を行うことそれ自体は能力感への脅威を必ずしも促進させるとはいえないかもしれない。なぜなら、援助を求める際の他者との能力比較が脅威的になるというのは、学業的援助要請を脅威的な行為として認知していることが前提であり、そもそも学業的援助要請を脅威的であると認知していない者にとっては、能力比較の傾向が高かろうが低かろうがそのこと自体が学業的援助要請を差し控える要因とはなりえないと思われるからである。それでは、学業的援助要請を脅威的であると認知するか否かを決定する条件とは何であろうか。このことについてこれまでは学業コンピテンスの影響が主に検討されてきた。学業コンピテンスとは、学業に対する認知された有能さのことであり、従来の研究では、学業コンピテンスが低い者ほど、学習場面において必要な援助を要請する際の自尊心への脅威が高くなることが明らかにされている (Newman, 1990 ; Ryan & Pintrich, 1997)。この結果については、「コンピテンスの高い学習者は学業について肯定的自己認知を持っているため、援助要請の原因を他者は自分の能力の無さに帰属させないが、その一方で、コンピテンスの低い学習者は学業についての肯定的自己認知をもっていないために、他者に援助を求めるという自分にとって否定的な情報に敏感に反応し、より防衛的になる」という傷つきやすさ仮説 (vulnerability hypothesis) と呼ばれる説明から解釈されている (Karabenick & Knapp, 1991)。社会的比較志向性と学業コンピテンスの関連を考えると、社会的比較志向性のうち能力比較が学業的援助要請に及ぼす影響は、学業的援助要請を脅威的であると認知する学業コンピテンスの低い者で特に顕著になることが予想される。

さて、これまでは社会的比較志向性の中でも能力比較が学業的援助要請に及ぼす影響について述べてきた。しかし、もう一つの下位概念である意見比較については別の関連の仕方が予想される。学業的援助要請における社会的比較の役割は必ずしも能力感への脅威に関するものばかりではないかもしれない。すなわち、自分の理解度を確かめることを目的として、自分が解けない問題を他者がどのくらいできているのかを知るための手段として学業的援助要請を行うことも考えられるのである。ここでの社会的比較の役割はいわゆる自己査定の動機 (Festinger, 1954) に基づくものであると思われるが、こうした自己査定を目的とする意見比較の場合においては、むしろ社会的比較を行う者ほど学業的援助要請を行うことが考えられる。

以上の議論より、社会比較志向性及び学業コンピテンスと学業的援助要請の間には関連があることが予想される。しかし、これまで行われてきた研究において、学業的援助要請における社会的比較の役割については結果の解釈として述べられることが多く、それを実際に検討することはほとんど行われていない。個人特性として測定可能な社会的比較志向性を取り上げ、これと学業的援助要請の関連を検討することは、学業的援助要請における社会的比較の役割を直接明らかにすることができるという点で意義があると思われる。そこで、本研究では、社会的比較志向性の2つの下位概念である能力比較と意見比較及び学業コンピテンスのそれぞれと学業的援助要請の関連から、学業

的援助要請における社会的比較の役割について検討することを目的とする。本研究の仮説は以下のとおりである。

仮説1 社会的比較志向性のうち能力比較について、学習者は一般に脅威的な行動とされる学業的援助要請を行う際に、他者との能力を比較する事でその脅威をさらに高めやすいことが考えられる。そのため、能力比較の傾向が高い者ほど学業的援助要請を行わない傾向にあるだろう。

仮説2 1の傾向は、学業的援助要請を脅威的な行動であると認知する傾向が高い学業コンピテンスの低い者において特に顕著になるだろう。

仮説3 社会的比較志向性のうち意見比較については、それが高い者ほど、自己査定動機を満たす手段として学業的援助要請を利用することが考えられる。そのため、意見比較の傾向が高い者ほど学業的援助要請を行う傾向にあるだろう。

方 法

調査対象者 本研究では、学業的援助要請が特に生起しなくなる発達段階である中学生 (Shwalb & Sukemune, 1998) を対象に調査を行った。調査対象者は、広島県下の公立中学校の1年生から3年生までの生徒209名 (男子106名, 女子103名) であった。

調査内容 本研究では、以下の内容を質問紙により調査した。

学業的援助要請 野崎 (2003) の学業的援助要請尺度のうち、適応的援助要請と援助要請回避に関する項目を使用した。野崎 (2003) の研究で使用された尺度は、教師と友達の2者に対して行われる学業的援助要請を測定するものであるが、本研究では、特に社会的比較に伴う脅威の傾向が高くなると考えられる友達に対する学業的援助要請のみ6項目 (例, 「自分の力で解くのが難しい問題にであったときでも、友達には聞きません」, 「自分で考えてどうしてもわからないときは、友達にわからないところを聞きます」) を扱った。各項目の内容がどのぐらい自分にあてはまるかについて「とてもあてはまる」, 「少しあてはまる」, 「どちらともいえない」, 「あまりあてはまらない」, 「ぜんぜんあてはまらない」の5段階評定でそれぞれ回答を求めた。

学業コンピテンス 桜井 (1983) が作成した認知されたコンピテンス尺度 (日本語版) を使用した。この尺度は4つの領域から構成されるが、そのうち学習領域の項目を一部修正した9項目 (例, 「数学はクラスの中でできるほうだと思いますか」, 「数学の宿題は短い時間でやり終えることができますか」) を使用した。各項目の内容が自分にどれほどあてはまるかについて、「はい」, 「どちらかといえばはい」, 「どちらかといえばいいえ」, 「いいえ」の4段階評定でそれぞれ回答を求めた。

社会的比較志向性 Gibbons & Buunk (1999) が作成した Socil Comparison Orientation Scale の日本語版である「社会的比較志向性尺度」 (外山, 2002) を中学生にふさわしい内容に一部修正して用いた。この尺度は「能力比較」と「意見比較」の2つの下位尺度から構成されており、項目数は全部で11項目 (例, 能力比較 ; 「自分の友達の成績と、それとは別の友達の成績をよく

比べます」, 「自分がどれくらい勉強ができるかを, 他の人とよく比べます」, 意見比較; 「何かについて, もっと知りたいと思うとき, それについて, 他の人が何を考えているのかよく知ろうとします」, 「他の人とお互いの意見や経験について話すのが好きです」) である。各項目の内容に自分がどれほどあてはまるかについて, 「とてもあてはまる」, 「少しあてはまる」, 「どちらともいえない」, 「あまりあてはまらない」, 「ぜんぜんあてはまらない」の5段階評定でそれぞれ回答を求めた。

調査方法 調査は各クラス毎に, 担任教師により授業時間を利用した一斉調査法で行われた。

結果と考察

1. 尺度の検討

まず, 学業コンピテンス尺度の9項目について α 係数を算出した。その結果, .849と高い値を示した。そのため, この9項目の平均値を学業コンピテンス得点とした。

次に, 社会的比較志向性尺度の11項目については, Gibbons & Buunk (1999), 外山 (2002) に従い2因子構造を想定した因子分析(主因子法, Varimax回転)を行った。その結果, 外山 (2002) とほぼ同様の「能力比較」と「意見比較」の2因子が抽出された。しかし, いくつかの点で外山 (2002) の研究とは異なる結果がみられた。まず, 外山 (2002) において「能力比較」因子に属していた項目11「自分の立場と他の人の立場の違いを決して考えたりしない」については, 共通性が.100以下と極端に低い値を示したため, 本研究では除外した。この項目については, Gibbons & Buunk (1999) では「意見比較」に高い負荷を示すという結果が得られている一方で, 外山 (2002) では「能力比較」に高い負荷を示すという研究のたびに結果が異なるという点で問題視される項目である。本研究で極端に低い共通性を示したという結果を併せて考察しても, この項目が社会的比較志向性を構成する項目として妥当かどうかについてはさらなる検討の余地がある。次に, 項目9「私は, 他の人だったら同じ場面でどうするのかをいつも知りたいです」について, 外山 (2002) では, 「能力比較」, 「意見比較」ともに同程度高い負荷量を示していたため除外していたが, 本研究の結果は「意見比較」因子に高い負荷量を示していた。この結果は外山 (2002) とは異なるものの, オリジナルである Gibbons & Buunk (1999) と同様の結果である。そのため, 本研究では項目9を「意見比較」因子を構成する項目として扱った。以上より, 本研究では, 「自分がどれくらい勉強ができるかを, 他の人とよく比べます」をはじめ6項目より構成される「能力比較」尺度, 「自分と同じようなことで困っている人が, 何を考えているのか知ろうとします」をはじめ4項目より構成される「意見比較」尺度として, それぞれの平均値を尺度得点とした。

最後に, 学業的援助要請尺度については, 因子分析(主因子法, Varimax回転)を行った結果, 1因子構造が明らかになった。野崎 (2003) の研究では, 適応的援助要請と援助要請回避は異なる尺度として扱っていたが, 本研究では援助要請回避が負の負荷量を示し適応的援助要請と同じ1因子としてまとまるという結果になった。そこで, 本研究では, 援助要請回避を逆転項目とし

て扱い6項目の平均値を学業的援助要請得点とした。6項目の α 係数は.802と高い値を示し、問題はみられなかった。各尺度の基本統計量を表1に示す。

表1 各尺度の基本統計量

	M	SD
学業コンピテンス	2.44	0.70
能力比較	2.76	0.70
意見比較	3.00	0.91
学業的援助要請	3.75	0.82

2. 各尺度間の相関係数

各尺度間の相関係数（Pearsonの積率相関係数）を算出した（表2）。その結果、学業的援助要請と学業コンピテンス及び意見比較の間に有意な正の相関関係がみられた。この2つの相関については、学業コンピテンスと意見比較の間にも低い有意な相関関係がみられるため、念のため各変数を統制変数とした偏相関係数を算出した。その結果、学業コンピテンスを統制変数とした場合の意見比較と学業的援助要請の偏相関、意見比較を統制した場合の学業的コンピテンスと学業的援助要請の偏相関はいずれも有意であった。そのため、学業コンピテンス、意見比較ともに独立して学業的援助要請と有意な相関関係を示すといえる。学業的援助要請と学業コンピテンスの関連については、学業コンピテンスの低い生徒ほど学業的援助要請を行う際の脅威が高くなるために学業的援助要請を差し控える傾向にあるという従来の「傷つきやすさ仮説」の説明から予想される結果であるといえる。また、意見比較と学業的援助要請の関連については、自分がどのくらい理解できているかを確認するために他者と比較するといった自己査定に基づく動機を満たす手段として学業的援助要請を利用するという本研究の仮説3を支持する結果であるといえる。

一方、能力比較と学業的援助要請については有意な相関関係はみられず、仮説1は支持されなかった。しかし、問題の部分でも述べたように、他者との能力比較が援助要請に伴う自尊心への脅威を促進させるのは、そもそも学業的援助要請を脅威的な行為であると認知する傾向の高い学業コンピテンスの低い生徒に特有の傾向であるかもしれない。そのため、仮説1は支持されなかったものの仮説2については依然検討の余地がある。そこで、学業的援助要請における能力比較と学業コンピテンスの交互作用を予想し、次の分析で詳細な検討を行うこととした。

表2 各尺度間の相関係数（Pearsonの積率相関係数）

	学業コンピテンス	能力比較	意見比較	学業的援助要請
学業コンピテンス	—			
能力比較	.095	—		
意見比較	.269**	.408**	—	
学業的援助要請	.224**	.119	.252**	—

注) * $p < .05$, ** $p < .01$

3. 学業コンピテンスと社会的比較志向性が学業的援助要請に及ぼす影響

学業的援助要請と社会的比較志向性が学業的援助要請に及ぼす影響を検討するために、学業コンピテンス及び社会的比較志向性の2要因について中央値を基準に2群に分割し、それぞれ高群と低群に設定した。能力比較、意見比較のそれぞれにおける高低両群の尺度得点の基本統計量を表3に示す。

表3 能力比較、意見比較それぞれにおける高群と低群の尺度得点の基本統計量

	低 群			高 群		
	N	M	SD	N	M	SD
能力比較	98	2.17	0.45	78	3.35	0.39
意見比較	95	2.05	0.58	91	3.80	0.47

まず、学業コンピテンスと能力比較の2要因を独立変数、学業的援助要請を従属変数とする分散分析を行った。結果のグラフを図1に示す。分析の結果、学業コンピテンスについては、有意な主効果がみられ、学業コンピテンスの高い生徒が低い生徒よりも学業的援助要請を有意に多く行う傾向にあった ($F(1, 182) = 6.21, p < .05$)。この結果については相関の結果と同様に「傷つきやすさ仮説」に基づく従来の研究結果に従うものである。しかし、能力比較については有意な主効果はみられなかった。さらに予想された能力比較と学業コンピテンスの交互作用についても有意な結果はみられず、本研究の仮説1、仮説2のいずれも支持されなかった。

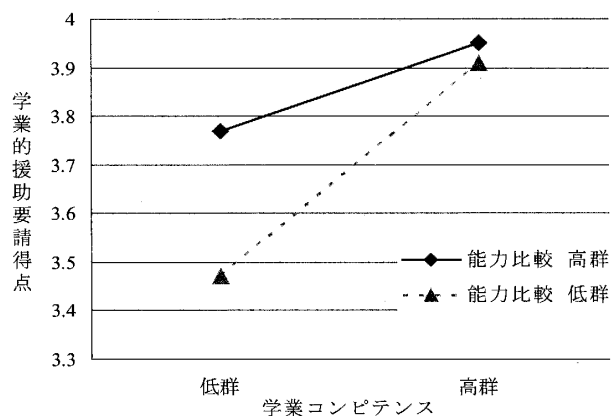


図1 学業コンピテンスの高低群、能力比較の高低群における学業的援助要請得点

次に、学業コンピテンスと意見比較の2要因を独立変数、学業的援助要請を従属変数とする分散分析を行った。結果のグラフを図2に示す。分析の結果、意見比較の有意な主効果がみられ、意見比較の高い生徒が低い生徒よりも有意に多く学業的援助要請を行う傾向にあった ($F(1, 159) = 6.71, p < .05$)。この結果は仮説3を支持する結果であった。すなわち、この結果から、意見比較をより多く行う生徒は、自分がどれほど理解できているかを確認したいといった自己査定への動機を満たす手段として学業的援助要請を利用することが示唆された。また、学業コンピ

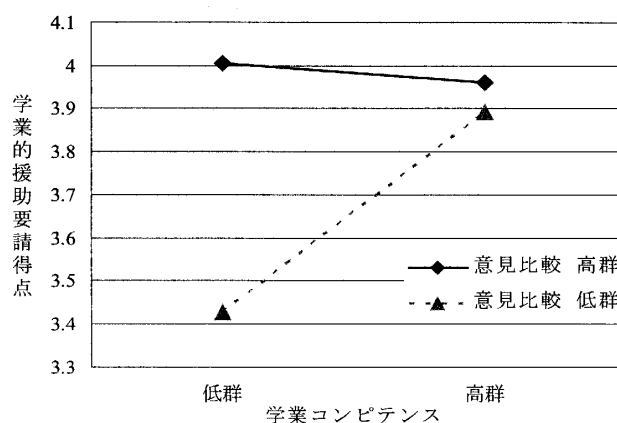


図1 学業コンピテンスの高低群、意見比較の高低群における学業的援助要請得点

テンスと意見比較の有意な交互作用もみられた ($F(1, 159) = 4.23, p < .05$)。下位検定の結果、意見比較低群において学業コンピテンスの有意な単純主効果がみられ、学業コンピテンスの高い生徒が低い生徒に比べて有意に多く学業的援助要請を行う傾向にあった。一方、意見比較高群においてはそのような結果はみられず、意見比較高群も低群も同程度に高く学業的援助要請を行う傾向にあった。この結果については、従来より「傷つきやすさ仮説」に基づく関連が示されてきた学業コンピテンスの学業的援助要請に及ぼす影響が意見比較の程度により異なるということを示した点で興味深い。すなわち、課題に対する自分の理解の程度を知りたいという自己査定動機に基づいて学業的援助要請を行う生徒は、学業的コンピテンスが低い生徒でも高い生徒と同様に学業的援助要請を行う傾向にあるといえる。

4. まとめと今後の課題

本研究の結果をまとめる。本研究では、社会的比較志向性の2つの下位概念である能力比較と意見比較のそれぞれと学業的援助要請の関連から、学業的援助要請における社会的比較の役割について検討した。能力比較については、それが高い生徒ほど要請の際の脅威が高くなるため学業的援助要請を回避する傾向にあること（仮説1）、さらには学業的援助要請に対する能力比較と学業コンピテンスの交互作用（仮説2）を予想し検討した。分析の結果、能力比較についてはこれら2つの仮説を支持する結果は得られなかった。一方、意見比較については、その傾向が高い生徒ほど自己査定動機から学業的援助要請を多く行うこと（仮説3）を予想し、検討した。その結果、仮説を支持する結果が得られた。以上の結果から、学業的援助要請において社会的比較志向性が果たす役割は、従来述べられてきた自尊心への脅威を背景とするネガティブな役割ではなく、課題に対する自分の理解の程度を確認するための積極的な手段として学業的援助要請を活用するというポジティブな役割であることが示されたといえる。学業的援助要請と社会的比較のこのような関連についてはこれまで焦点を当てられることが少なく、ほとんど検討されていない。そのため、本研究で明らかになった結果は、課題解決のための方略としてだけではない従来とは

異なる学業的援助要請の役割を示唆したという点において意義があるといえよう。

一方で、仮説が支持されなかった点、すなわち能力比較と学業的援助要請の関連がみられなかった結果については、本研究において検討不足な点がいくつかあったことが原因として考えられる。

まず、本研究では、学業的援助要請を行う相手である友達について、どのような友達かという友達の種類にまで言及していなかった。つまり、被調査者が回答する際に思い浮かべた「友達」が、彼・彼女らにとってどれほど親密性の高い相手であるかどうかについては尋ねなかった。本研究では、能力比較について、より類似した他者に援助を要請する場合の方が能力感への脅威が高いという自尊心への脅威に基づく結果を予想した。確かに、社会的比較の対象となる自分と類似した身近な他者に援助を求めることは、教師のような比較の対象とならない他者に援助を求めるときよりも自尊心が傷つくといえる。しかし一方で、一度や二度援助を要請したところで相手からの評価が変わることのない親密な関係にある二人の間では、互いに援助を要請し合うことでさらに親密さを深めることさえあるという見解もある（西川, 1998）。このように、一口に友達に対する学業的援助要請といえども2者間の親密さが異なれば、要請者にとっての学業的援助要請の意味は大きく異なることが考えられる。さらに、学校現場でグループ学習や助け合い学習をはじめとする協同学習がしばしば授業に取り入れられるということも併せて考慮に入れると、生徒にとって特に仲の良い友達に学業的援助要請を行うということは、決して社会的比較による自尊心への脅威を導くことを意味するのではなく、本研究で明らかになったようにお互いの学習の進行具合を確認する手段という意味を持っているのかもしれない。今後はこうした点も考慮に入れて詳しく検討していく必要があるだろう。

次に、本研究では能力比較と学業的援助要請の関連を自尊心への脅威を背景に予想したが、脅威の態度を直接測定したわけではなかった。従って、本研究の結果だけから、他者との能力比較は学業的援助要請に伴う自尊心への脅威を引き起こさないと結論づけることはできない。そのため、今後は、自尊心への脅威を実際に変数として扱うことで、その影響を直接検討する必要があるだろう。しかし、能力比較と学業的援助要請の関連のみならず、能力比較と学業コンピテンスの交互作用もみられなかった結果については、そもそも明らかになった学業コンピテンスと学業的援助要請の関連自体が、自尊心への脅威を背景としたものであるのかという疑問を提示する。さらには、わが国における脅威の態度から学業的援助要請への影響の結果が諸外国の結果ほど強いものではないこと（野崎, 2003）や、わが国の対人関係が諸外国と比較して、相互依存性が強く、援助要請を許容する雰囲気があること（相川, 1989）を考慮すると、わが国では諸外国と異なり、自尊心への脅威が学業的援助要請に及ぼす影響自体がそれほど強いものではない、もしくはなんらかの条件を伴うことも考えられる。従って、本研究で明らかにならなかった能力比較及び学業コンピテンスと学業的援助要請の関連については、その背景となる自尊心への脅威の影響も含めてさらなる検討を進めていく必要があるだろう。

引用文献

- 相川 充 1989 援助行動 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一（編）社会心理学パースペクティブ
1 個人から他者へ 誠信書房
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117-140.
- Gibbons, F.X., & Buunk, B.P. 1999 Individual differences in social comparison : Development of a scale of social comparison orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76, 129-142.
- Good, T.L., Slavin, R.L., Harel, K.H., & Emerson, H. 1987 Student passivity : Study of question-asking in K-12 classroom. *Sociology of Education*, 60, 181-199.
- Karabenick, S.A., & Knapp, J.R. 1991 Relationship of academic help seeking to the use of learning strategies and other instrumental achievement behavior in college students. *Journal of Educational Psychology*, 83, 221-230.
- Nadler, A., & Fisher, J.E. 1986 The role of threat to self-esteem and perceived control in recipient reactions to aid: Theory development and empirical validation. In Berkowitz, L. (Ed.) *Advances in experimental social psychology*, Vol.19. New York: Academic Press.
- Newman, R.S. 1990 Children's help seeking in the classroom: The role of motivational factors and attitudes. *Journal of Educational Psychology*, 82, 71-80.
- Newman, R.S., & Goldin, L. 1990 Reluctance to seek help with homework. *Journal of Educational Psychology*, 82, 92-100.
- 西川正之 1998 援助行動研究の広まり 松井 豊・浦 光博（編）対人行動学研究シリーズ7
人を支える心の科学 誠信書房
- 野崎秀正 2003 生徒の達成目標志向性とコンピテンスの認知が学業的援助要請に及ぼす影響—抑制態度を媒介としたプロセスの検証— 教育心理学研究, 51, 141-153.
- Ryan, A.M., & Pintrich, P.R. 1997 "Should I ask for help?" The role of motivation and attitude in adolescents' help-seeking in math class. *Journal of Educational Psychology*, 89, 329-341.
- 桜井茂男 1983 認知されたコンピテンス測定尺度（日本語版）の作成 教育心理学研究, 31, 245-249.
- Shwalb, D., & Sukemune, S. 1998 Help seeking in the Japanese college classroom: Cultural, developmental and social-psychological influences. In Karabenick, S.A. (Ed.) , *Strategic help seeking: Implications for learning and teaching*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 高田利武 1992 他者と比べる自分 安藤清志・松井 豊（編）セレクション社会心理学3 サイエンス社
- 外山美樹 2002 社会的比較志向性と心理的特性との関連—社会的比較志向性尺度を作成して— 筑波大学心理学研究, 24, 237-244.
- Zimmerman, B.J., & Martinez-Pons, M. 1990 Student differences in self-regulated learning: Relating grade, sex, and giftedness to self-efficacy and strategy use. *Journal of Educational Psychology*, 82, 51-59.

謝 辞

英文校閲には本学教授 Richard Baker氏の協力を得ました。ここに記して感謝いたします。